

片桐 薫「グラムシの科学・技術論とわれわれの時代」

・ グラムシという人

アントニオ・グラムシ（1891～1937）は、イタリア・サルデーニャの片田舎に生まれ、生まれてまもなく脊椎カリエスを患い、それがもとで生涯の身障者になった。そのうえ、父親が公金横領の罪で6年間も投獄されたため、幼い頃からアルバイトで貧しい家計を支えなければならなかった。父の出獄後、家族みんなの支えで、中学・高校そしてトリノ大学の文学部近代言語学科に給費生として入学することができた。

そして大学四年生のとき第一次大戦が勃発し、大学を中退して社会党の機関紙『アヴァンティイ！』編集部トリノ支部に入り、記者として活動することになった。以後、第一次大戦後、学友仲間と週刊紙『新しい秩序（ルダ・イ・オ・ヴォ）』を創刊し、トリノの労働運動にかかわっていくこととなる。

その後イタリア共産党コミンテルン支部の結成にかかわり、1922年に党を代表してコミンテルン第2回拡大執行委員会に出席。その後、党書記長として活動し、権力に到達したファシズムに抗して闘うが、27年末、逮捕・投獄され、10年余りの獄中生活の後、1937年4月に亡くなった。その獄中生活を通じて33冊の「ノート」を残した。それが有名な『獄中ノート』である（この辺の事情については、近拙著『グラムシ「獄中ノート」解説』、こぶし書房刊および『新グラムシ伝』、日本評論社刊に詳しい）。

彼は政治運動家・政治思想家で、いわゆる科学の専門家ではなかったが、トリノの労働運動では工場の技術革新について積極的に発言し、また「獄中ノート」ではかなりまとまった「科学論」にかかわる覚書を残した。それらは、彼の知的形成過程においてきわめて重要な意味をもつものだった。

にもかかわらず、これまでのグラムシ研究において私の知るかぎり、重要な主題として取りあげられてこなかった（1）ことに、私はかねてから疑問に思っていた。ところがこのたび、それについて発言の場を、湘南地方を基盤に地道な活動を続けている「湘南科学史懇話会」（代表・猪野修治氏）から与えられてくださったことに、感謝しなければならない。

私の報告は以下のような内容であり、一般の「科学・技術論」とはいささか異なる。

グラムシの技術論は、工場および労働者の発見からはじまる。

グラムシの「アメリカニズム・フォーディズム」を科学・技術の観点から観る。

『岐路に立つ科学』を契機とするグラムシの科学論を紹介する。

第二次大戦後、顧みられなかったグラムシの科学・技術論とその結果について。

グラムシの科学・技術論を念頭に、新しい文明の時代を考える。

しかし、この報告に先だって、おことわりしていおかなければならないのは、何よりも、報告者の私についてである。さきほど、「グラムシは科学・技術の専門家ではなかった」といったが、それを紹介する私は、科学・技術についてのまったくの素人で、とんでもない見当違いやその基礎的素養の浅さを露呈することになりかねないが、それは、この「懇

話会」にお集まりの皆さんからご批判を頂くほかない。

・ アメリカニズムとフォードイズム

1. テイラー・フォード・システム

産業革命以降、技術はヨーロッパにおいて、それまでの親方・徒弟制度とギルドから開放された機械ないし作業機による巨大な生産力をつくり出した。そして技術を習得したい者はだれでも学べる技術の学校、すなわち工業専門学校や農業学校や工業学校が設立されるようになった。

他方、伝統的な技術や生まれ始めた技術の学校によらない人びとの個人的才能・工夫・努力によって新しい科学技術の時代＝大工業主義の時代を迎えることとなった。カーネギーによる鉄鋼業、エディソンによる電気産業、ダイムラーによるガソリン・エンジン、デュポンによる化学産業等々、そして彼らとともにあげなければならないのが、ヘンリー・フォードの自動車産業である。

そのフォードが自動車会社を設立したのは一九〇三年のことで、安価な自動車の大量生産が開始されたのはそれから一〇年後のことである。そこには、新しい技術転換の時代における労働・機械・労働組織の問題に正面から取り組んだアメリカの技師フレデリック・テイラーの強い影響があった。

テイラーは科学を基礎に合理的・能率的な作業管理を採用するならば、労使双方が繁栄し対立は除去しようと考へ、一九一一年、アメリカ機械技術協会で「科学的管理法」を発表した。それは、労働者一日あたりの標準作業量を科学的に決めるための労働時間研究、標準作業量を達成した労働者には一定の高賃金を支払う出来高払制の採用、作業を計画部門と現場管理部門に分け、専門化した機能別職長制度の導入などを基軸にしたものだった。

ところが多くの経営者は、テイラーのこの科学的管理法は自分たちの経営権を薄切りにして奪うものだと警戒したが、それ以上に強硬に反対したのが労働者たちだった。それまで問題にされたことのなかった「時間」というようなものを研究と称して、労働者の背後でその全行動を測定することに反発し、その導入をめぐるアメリカやフランスで労使間の緊張をまねいた。にもかかわらず、テイラーの「科学的管理法」が広く関心をよぶのは、新しい産業技術の導入にいかにか転換するかが問われていたからだった。

このテイラー主義を実地に応用したのがフォードで、経営者としての彼の先見性の一つは、1800年代末に登場し、限られた人たちの高価で贅沢な財産と見なされていた自動車を、「小型で軽便な自動車」を「労働者がもつことができるような低価格車の生産」をめざしたことだった。もう一つはその製造方法にあった。テイラー主義の信奉者フォードは、それまで一台ごとに固定したままで組み立てられていた自動車を、シカゴの牛のと殺場での搬送システムに似た組み立てラインに学んで、コンベヤー速度にあわせた四五の組み立て作業で仕上げることにした。

こうして、従来一二時間を要した一台の組み立ては一時間半に短縮され、三年間に三万六〇〇〇台の自動車を売るという前代未聞の成果をおさめた。さらにもう一つは、「従業員の管理」への細心の注意だった。新しい生産様式が必要とする労働者の肉体的・精神的

安定をいかに確保するかに心をくだき、高賃金と教育施設の充実とともに、従業員の私生活にまで干渉し統制するため、伝統的な清教主義（ピューリタニズム）にたって飲酒癖や性的墮落にまで目を光らせた。つまりフォードにとって、労働者もまた機械の一部であり、それが「部品」としてひんばんに故障したり取りかえることは大きな損失だったのである。

こうした最大限の生産効率にもとづくフォードの成功なしには、テイラー主義も適用されることのない「理論」として止まったであろう。このテイラー主義・フォード主義による生産システムがアメリカであみ出され広がるのは、当時のアメリカの下層労働者の多くがヨーロッパの後進地域からの移民だったという背景があった。

はじめはテイラー・システムの特異な応用にすぎないとみられていたフォードの生産方式も、第一次大戦の勃発とともに、全ヨーロッパへ諸産業へと広がっていった。とりけ軍需物資の大量消耗戦として始まった近代戦のもと、集中的・画一的・規格的兵器の急速な生産のための新しい生産様式としていたるところで採用され、戦後もほとんどの國に主要な生産様式として普及した。

それだけではない。この大工場の組織原理は、もっとも先進的で効率的なものとして、政府、軍隊、学校、病院などあらゆる機関・組織のモデルとして採用されていった。また資本主義への「対抗」をめざす社会主義政党や労働組合の組織形態・方法も、その例外ではなかった。

2. 『新しい秩序(オルディネ・ヌオーヴォ)』の創刊と工場労働者の発見

グラムシがこうしたテイラー・フォード・システムに出会うまでには、彼自身の思想的ステップのけるいくつかの「幸運」が重なっていた。

なによりも彼自身、一九一一年、二〇歳の時、イタリアきっての近代的工業都市トリノの大学文学部に入学したことだった。そこには自動車工場のフィアトやランチャがあり、フィアトを創設したジョヴァンニ・アニェッリは、一九一一年、アメリカに渡ってフォードの工場を見学し、その生産システムの全面的な導入をはかっていたのである。

そして第一次大戦後の革命的雰囲気の中で、グラムシは旧学友仲間と社会主義の文化週刊紙『オルディネ・ヌオーヴォ（新しい秩序）』を創刊した。はじめのうちは漠然とした「情熱」が先走るだけだった彼らに転機をもたらしたのが、その編集会議における論議だった。

われわれは工場組織を研究する必要がある。つまり資本主義とその組織体制に注意を向けなければならない」という一技術者の発言にグラムシはただちに反応した。「そうだ、労働者のあいだで何が起きているかを研究しなければならない。……だがイタリアに、トリノに、ソヴィエト政府の萌芽、希望、兆しが存在しないだろうか？」。それに応えたのが、ロシアの社会革命党員で帝政ロシア官憲の追及のがれてイタリアに亡命、イタリア社会党に入党していた同志で、逆に質問した。「なぜ、これまでイタリアでは、内部委員会の大会が開かれないのか？」。

それはグラムシにとって、いはいわば「天の啓示」だった。「そうだ、イタリアに、トリノに、労働者政府の萌芽、ソヴィエトの萌芽が存在している。それは内部委員会だ。

われわれはこの労働者の組織を研究してみよう。それをたんに物の生産組織としてではなく、資本主義的工場を労働者階級に必要な組織形態として、政治組織として、労働者自治の<国民的領域>として研究してみよう」と確信していった(2)。

この工場内部委員会は一九〇六年に発足したが、労働者の不満解消のための組織として、その要求を経営者側に伝えるというあいまいな役割をもつに過ぎなかった。だが戦争中になると、労働者からより大きな協力を引き出すための組織として、政府によって正式に承認され、任期一年の代表委員(その数は企業規模によって異なる)を選ぶことができるようになっていた。とはいえ実際の選挙では、労働者仲間の知名度や人柄が唯一の判断基準とされ、挙手や拍手によって決められ、しかも工場の生産機構や労働組織はまったく考慮にいれられておらず、社会主義や労働組合の指導者たちからは、ほとんど無視された存在だった。

グラムシに「幸運」だったのは、当時のトリーノが彼らの新しい着目と主張を受け入れるだけの客観的な諸条件をそなえていたことだった。近代工業都市トリーノの自動車産業の大工場では、テラー・フォードイズムの新しい生産システムの導入にともない、年配労働者の熟練や技能に代わって、経験年数のあさい若い労働者でも十分作業能力を発揮することが可能になっていた。

つまり工場内で、大きな時代的転換が始まっており、そうしたなかでグラムシや『オルディネ・ヌオーヴォ』グループが工場内部委員会や工場の生産機構に着目したのである。こうしてグラムシは、『オルディネ・ヌオーヴォ』紙の編集部に集まってきた労働者たちから、工場に導入されているテラー・フォード・システムについて耳にし、しかもそれが「労働者大衆に歓迎されている」ことに強い関心を寄せていることを知った。

そして戦争勃発以降の工場内における労働組織の急速な変化を直視し、それを工場評議会運動の中心テーマにすえ、それへの対応を通じて労働者の自発的責任や自己規律、そして文化と心理の獲得という観点から取り組んだところに、グラムシの独自性があった。

すなわち新たに組織された工場法議会の任務として、ブルジョワ的生産制度や作業過程を研究すること、新しい技術革新が生産能力を増大させるかぎり、それがたとえ労働者の利害と相反するようなことがあっても、それを受け入れるよう労働者をはげますこと、

自己の職業的能力を高めようと望むすべての労働者のために工場内に職業学校を組織すること、そうすることによって、すでに労働者階級は経営者がいなくても自分の手で、巧みに生産管理をなしとげる可能性をもっていることを自覚し、しかもそのことが経営者自身に、彼らの終焉が近いことを具体的に感得させる唯一の道だと訴えた。

当時、このテラー・フォード・システムは労働運動にとって重大な問題として、早くから国際的に活発な論議をよんでいた。たとえばE・ベルンシュタインはそれを「労働の緊張緩和の可能性」をもつ「第一歩」と見ていた。それにたいしてレーニンは一九一三年、テラーの「科学的方式」の特徴を、「テラー・システムは機械による人間の奴隷化だ」と強調した。同様な論議はイタリアでも見られ、その肯定的な可能性一般を支持する「右派」と、労働強化の道具として反対する「左派」とに分かれていた。

グラムシはこの両派を改良主義および日和見主義として、激しく批判した。「彼らはい

ずれもそれへの具体的対応を用心深く避け、労働者階級と社会主義的変革との現実の問題を少しも研究しなかった。彼らはプロレタリア大衆ならびに歴史的現実との肉体的・精神的な接触をまったく失ってしまっており、いかなる行動もとれず、どんな具体的判断もできない饒舌で空虚な弁士となっている」(3)。

しかしながらこの工場評議会運動は、二年足らずでおわった(4)。ごく簡単に結うと、一つは、後にグラムシ自身自己批判するように、工場評議会運動を全国的に広げるという意識的な活動に欠けていたことである。もう一つは、当時、コミンテルンは社会党左派を分裂させ、各国にコミンテルン支部として「共産党」を結成させることを急いでいた。それに呼応して、「オルディネ・ヌオーヴォ」グループの活動家のほとんどが、「もはや工場評議会ではなくて、共産党だ」と流れていき、グラムシは孤立してしまったのである。

3. 獄中におけるアメリカニズム・フォーディズム論の展開

こうして、工場評議会運動の敗北し、その後、グラムシも共産党の創設に参加、コミンテルン執行委員としてのモスクワ駐在、書記長としての党の指導等々をへて、一九二六年の逮捕・投獄された。

グラムシが工場評議会運動の問題に立ちかえるのは獄中においてであり、それには一〇年以上にわたる自分自身の経験的・思想的な迂回が必要だった。そして獄中から大戦後のヨーロッパ社会の根底的变化を凝視し、西欧の危機に思いをめぐらせるなかで、新しい社会的・政治的主体形成の可能性を模索していった。そこにおけるキーポイントは、労働者階級がどのようにして自己の従属的状态から脱出していくかであり、トリノーにおける工場評議会運動を回想しながら、胸をはってこう書いている(5)。

イタリアの労働者たちは、個々人としても労働組合としても、積極的であれ消極的であれ、コスト引下げを目的とする技術、労働の合理化、企業全体のより完全な技術的組織化の導入にたいし、反対したことなど一度もなかった。それどころか、まったく逆だった。……つまり労働者こそが、新しくより近代的、工業的要求の担い手であって、彼らは自分たちのやり方でそれを粘り強く主張していたのだ。

よく知られている彼の「獄中ノート」で、「アメリカニズムとフォーディズム」をまとめるのだが、彼の科学・技術論の側面から次のように見ることができる。

そこで彼は、「工業主義の歴史は、つねに人間の“動物性”の要素にたいする絶え間ない闘争であった」(6)とし、それは人間の本能(生まれながらの、つまり動物的、原始的)を秩序・正確さ・精密さといったより複雑で厳格な新しい規律や習慣に服従させる過程だったととらえる。

だが彼は、この新しい労働方法としてのテイラー・フォード・システムおよび合理化一般が、労働者にたいする強制するという側面だけを見ていたのではなかった。同時にそこにおける「生産と労働の新しい方法、それと切り離すことのできない特定の生き方、考え方、生活感覚」(7)をとらえ、そこに新しい型の文明の登場を複眼的に洞察していたところに、グラムシのオリジナリティがあった。しかもそこで、工業モデルの社会全体への

拡大、したがって企業組織と社会組織の接近という発想によって、マルクスの「生産の無政府性」という考え方の質的な訂正をしたのである。

もう一つは、「アメリカニズムとフォーディズム」とのかかわりにおける「新しい性の倫理」の問題の提起である。大戦後、ヨーロッパにおける社会的・道徳的混乱のなかで、人間行為のすべてを性欲で説明するフロイトの心理学やアメリカ文明における生活スタイルの急変と関連して、「世紀末の性倫理」が論じられていた。グラムシはアメリカニズムにおける重要な側面としての女性解放、すなわち参政権の獲得、家事労働からの相対的開放、服装・容姿などにおける大きな変化等々に注目するとともに、科学技術にもとづいた生産と労働の新しい方法との関係において新しい性の倫理を見定めようとしたのである。

すなわち「女性の新しい人格形成」を、「性」にかかわるもっとも重要な市民的倫理の問題として提起し、「女性が、男性からの自立だけでなく、自分自身と性との関係における自らの役割を考える新しい方法を身につけないかぎり、性の問題は不健全な形をとり続けるだろう」としてこう結ぶ。「生産と労働の合理化によって求められる人間の新しいスタイルは、性本能がそれに順応して規制され、理性化されないかぎり、成長しないであろう」(8)。

当時、フォーディズムは経済的にもっとも発展した国アメリカからはじまって、科学技術的にあまり合理化されていないヨーロッパ社会に大浸透を開始しており、そのアメリカ化もその一環だった。しかしながらグラムシは、アメリカ文明とヨーロッパ文明を対置し、「新しい文明・文化」の“侵入”に反発し、古いヨーロッパを楽しんでいるヨーロッパ知識人の「反アメリカニズムは愚かというよりはむしろ滑稽」(9)だと批判するだけでなかった。

それが先進的な産業発展を促すという限りにおいて、肯定的にとらえていた。すなわち科学技術にもつづく「アメリカ化は、特定の環境、特定の社会構造(あるいはそれを創出する断固たる意思)、そして特定の型の国家を必要とする。だがその国家は、自由貿易主義や現実の政治的自由という意味での自由ではなく、自由な創造および経済的個人主義(「市民社会」としてそれ自体の史的発展による固有の手段で工業的集中と独占の体制に到達する)という、もっとも基本的な意味での自由主義国家である」(10)と強調した。

こうしてグラムシは、資本主義の運命にたいする破局論でもロマンチックな願望でもない、新しい歴史的主体の形成を念頭においていたのである。

・ 『岐路に立つ科学』に関連して

1. グラムシの科学論

獄中でグラムシが、アメリカニズム・フォーディズム問題への実践的経験とは異なった角度から、科学論にかんする主題にとり組むのは、1932年の中頃からだった。その契機となったのが、一九三一年六月二九日 - 七月四日にかけて、ロンドンで国際科学史アカデミー主宰の「第二回国際科学史・技術史会議」の開催とそこで発行されたソヴィエト代表団の報告集『岐路に立つ科学』の入手からだった。

もう少し詳しくいうと、そこにはN・ブハーリンを団長とするソヴィエト代表団八人が参加・報告し、『岐路にたつ科学』と題して刊行された。それはイギリスの社会主義的科学家たちだけではなく、国際的にも大きな反響をよび、それは日本でも翌年、全文が翻訳、紹介された。

こうした反響にはさまざまな背景があった。

一つは、当時ヨーロッパにおいて、諸科学がめざましい成果をあげつつある反面、科学が世界に関する全体像をあたえず、たんなる専門化に墮落しているのではないかという疑念や、「科学への迷信」が逆に科学への「敵対」に変わる可能性を秘めているのではないかといった、漠然たる一般の疑念があった。

もう一つは、当時のイギリスでは、科学史にかんする定期刊行物がないことに見られるように、科学史に関心をよせるマルクス主義的科学家の力が弱く、新しい世代の科学史専門家の養成に力をいれていなかったことである(11)。

さらにもう一つは、一九二九年の世界恐慌で全資主義世界が混乱をきわめているとき、ソ連だけはその圏外にあって第一次五ヶ年計画にとりみ、しかもそのなかでロンドンの科学史・技術史の国際会議に異例ともいえる強力なソ連の強力な代表団の派遣だったのである(12)。

当時、ケンブリッジ大学にあって獄中のグラムシを助け、知的対話をしていた友人ピエロ・ズラッファは、出たばかりのこの報告集『岐路にたつ科学』をタチャーナ・シュフトを介し、つぎのようなコメントを付してグラムシに届けた。

すべてのイタリア教養人には、大きな空白があります。つまり自然科学についての無知という大きな空白があり、クローチエはその極端で典型的な例です。哲学者たちは、科学者たちが科学において恥ずべき落第生であることを示せば、自分たちの仕事は片づいたと思っています。こうして自然科学は実証主義者の手にゆだねられたままでした。その結果については、われわれのよく知るところです(13)。

ズラッファのコメントはもちろん、送られてきた『岐路に立つ科学』は、「今日が新しい科学の時代への移行段階にあり、しかもそれは、大きな知的・道徳的危機とからみあいながら、新しい形態の“詭弁”を生み出してる」(14)ととらえていたグラムシの強い関心を惹くものだった。

ズラッファの見解に全面的に同意し、書き始めていた「哲学研究入門」と題する「ノート11」の「歴史的・批判的性格のメモと参照点」を10頁余りで中断して、「哲学と文化史の研究のための序論と着手のための覚書」と変え、「 . . . いくつかの予備的参照点」と題する長い論稿で、哲学としてのマルクス主義(実践の哲学)と民衆の現実の意識とのあいだの乖離をいかに克服するか、という問題に取り組んだ。そして「 . . . 『民衆の社会教程』(ブハーリン)の試みについての所見と批判的覚書」、「 . . . 科学と科学的イデオロギー」と題する本論に入り、そして「 . . . 思想の論理的諸装置」、「 . . . 科学的・哲学的言語の翻訳可能性」、「 . . . 雑録」と新しい科学の時代への移行段階の諸問題をめぐって、独自の観点から論じた。そのグラムシ「科学・技術論」の主要点を列記して見たい。

彼はまず、「科学の客観性」を問題にする。つまり科学は一つの世界観であり、一つの哲学であって、「科学的データではない」と強調する。またこうもいいかえる。「科学は一つの上部構造であり、一つのイデオロギーである」とし、それは「つねにイデオロギーの衣装をまとってあらわれる」。したがって科学に客観性の証拠を求めるのは誤りだと言明する。

もし科学の真理が確定的なものだとするならば、科学は科学として、研究として、新しい実験として存在することを止め、すでに発見されたものの通俗化だけに限定されるであろう。反対に「科学的真理」が決定的なものでも永続のものでもないとなれば、科学もまた一つの歴史的カテゴリーであり、つねに発展する運動である。

だとすれば科学の関心の対象は、現実の客観性などではなく、人間だということになる。つまり自らの研究の方法をねりあげ、自らの物質的な道具と区別・確認のための論理的道具とをたえず磨き上げる人間である。……人間なくして宇宙の实在に何に意味があるのか。すべての科学は人間の要求、人間の生活、人間の活動と結びついている(15)。

電気は歴史的に能動的であるが、それはたんなる自然力ではなく、人間によって支配され、私的所有の対象である物理的生産力全体に組み入れられる生産の要素として、〔はじめて〕能動的なのである。……また原子論が人間の歴史を説明するのではなく、その逆である。つまり原子論は、あらゆる科学的な仮説や見解と同様、上部構造である(16)。

「科学的に」予見できるのは、ただ闘争だけであって、この闘争の具体的諸契機までは予見できない。……〔人間の予見行為というのは〕人がどのようであったか、どのようであるかを認識するのであって、どのようになるかを認識するのではない。そのようなことは、「非实在」であって、認識不可能である(17)。

グラムシは、取り扱った諸課題のあいだの同質性や同価値を認め翻訳可能性という表現を使った。たとえばイギリス経済学とドイツ古典哲学とフランスの政治学とのあいだのある種の同価値による翻訳可能性を認めた。同じように、科学と哲学とは文明のある局面において、「基本的に」同一の文化的表現をもつとして、両者のあいだに同価値で相互に翻訳可能な上部構造を見ていた(18)。

科学への浅薄な熱狂には、科学や科学の方法にたいする極端な無知がかくされており、宗教的迷信と同様、滑稽な幻想や子供じみた観念をとめない、桃源郷タイプへのメシア的信仰と待望を生みだしている。こうした科学心酔は危険であって、重要なことは、科学の基本的な諸概念を改善し、科学普及の仕事を、何でも屋のジャーナリストやうぬぼれた独学者の手から、科学者やまじめな研究者の手に取りかえすことである(19)。

2. ブハーリン批判とその背景

こうした科学・科学観の前提作業としてグラムシは、クローチェを批判する。二〇世紀初頭のアインシュタインの相対性理論やプランクの量子論がそれまでの科学論の哲学的基礎をゆるがしていたにもかかわらず、クローチェは科学を自らの考察領域の周辺におき、自然科学における「エセ科学」を見ていたからである。

それ以上に、『岐路に立つ科学』に収録されていたブハーリンの報告文書「弁証法的唯物論的観点から見た理論と実践」にたいして全面的な批判を展開する(20)。

彼は、一九二一年にモスクワで出版されたブハーリン『史的唯物論の理論 マルクス主義社会学入門』（フランス語版）を義姉タチャーナに依頼して入手して読んでおり、すでに「ノート」の4、7、8の各所で、マルクス主義の安易な通俗化を批判しており、『岐路に立つ科学』に収録されたブハーリン報告がそれとほとんど変わることのないものだと知って、「ノート11」で全面的な批判を展開する。それは先に見たコミンテルンの「左旋回路線」（階級対階級、社会・ファシズム路線）へのグラムシの不同意のうえに展開されるものだった。

グラムシは、ブハーリンの『民衆のための教程』（以下、『教程』とする）が、＜古典＞の段階にたっしておらずまだ討論、論争、作成の段階にある学説の初歩的な本、すなわち＜教科書作成＞を意図していることを問題し、そこには「なんら弁証法とおぼしきものはない」と断定する。そしてブハーリンの誤りの根源を指摘する。

第一は、ブハーリンが歴史と社会学を区別し、マルクス主義を「“社会学”と体系的哲学という二つの部分に分ける主張にある」（21）。

第二は、ブハーリンが機械論的・進化論的立場の立場から、科学を技術手段に還元し、「科学の進歩は科学的道具の発展にかかっているかのように主張」して、「自然科学が唯一の科学あるいは最高の科学である」と考えていることである。

このような“科学論”は、工場評議会運動時代以来、「労働者こそが、新しいより近代的な工業的要求の担い手である」とし、「科学進歩の重要な“道具”は、知的秩序（そして政治的でもある）であり、方法論的なものである」（22）するグラムシにとって、認めることはできなかった。

第三は、ブハーリンは過去を“不合理”で“奇怪”なものとする形而上学の観点から出発し、その哲学史は奇形学史論になっていること批判した。グラムシは「逆に『〔共産主義〕宣言』は、死滅すべき世界にたいする最大の讃辞をふくんでいる」（23）として、「ブルジョワジーは歴史上きわめて革命的な役割をはたした」という言葉を対置する。

3. ブハーリン批判の背景

以上のようなグラムシの執拗なまでの『教程』批判の背景には、深い問題意識があった。何よりも、それへのエンゲルスの否定的な影響である。

「ノート15」でこうこう書いている。「『教程』にふくまれているおびただしい的はずれな意見の根源には、エンゲルス『反ディーリング論』や、マルクス主義の端緒的核心にたいするあまりにも表面的かつ形式的な概念体系作成の試みに求められなければならない。こうした試みは、完成度をほしがるスコラ的要求を満足させるにすぎない」（24）。前述のようにグラムシは『教程』を徹底的に批判しているが、それはまたレーニン『唯物論と経験批判論』にたいする批判でもあった。レーニンは同書で、「マルクスとエンゲルスとは自分たちの哲学的見解を、何度となく弁証法的唯物論とよんだ」（25）としており、それはマルクスとエンゲルス、マルクスとレーニンを思想的に不離一体のものとしてとらえてはならないとするグラムシの観点と相反するものだった。

しかも同書でレーニンが引用する大部分はエンゲルの『反デューリング』からであって、マルクスからの引用はたったの四回であり、しかもそれは主要点から外れた箇所での引用にすぎなかった。いくつかの証言によれば、投獄される前のグラムシはレーニンのこの書

を読んでいたが、「獄中ノート」ではそれに一度も言及していない。

さらに指摘しなければならないのは、こうしたマルクス主義思想の通俗化の典型は、後に『ソ連共産党（ボルシェヴィキ）史小教程』の第四章におけるスターリンの図式に見られるが、その設定はレーニン『唯物論と経験批判論』とブハーリン『教程』からひきだされたものだったのである。（26）。

先にもふれたように、この報告集は話題をよび、翌年、日本にも翻訳紹介されたが、科学史・技術史論のターニング・ポイントとしてとりわけ重視されたのはヘッセン報告で、ブハーリン報告はマルクス主義の古典的陳述と見られていた。なおこの『岐路にたつ科学』は日本にも翻訳紹介され、武谷三男は『科学』（1942・8）に「ニュートン力学の形成」と題する論文を発表した（27）。

・ 顧みられなかったグラムシの科学・技術論

1. 戦後のグラムシ研究の過程

このようにグラムシが凝視していた科学・技術は、第二大戦をつうじて資本主義国、社会主義国をとわずいっそう展開され、戦後も大量生産・大量消費やそれにもとづく大衆文化として世界的にひろがっていった。

そうしたなかで、グラムシの『獄中ノート』はイタリアで一九四八年から五一年にかけて主題別に整理され、六巻に分けて刊行された。だが、グラムシの「アメリカニズムとフォーディズム」は『マキアヴェッリと政治と近代国家についての覚書』の末尾の章に、「ノート11」のブハーリンの「＜社会学の民衆教程＞の試みにたいする批判の覚書」は『史的唯物論とベネデット・クロッチェの哲学』に入れられた。

つまりグラムシの科学・技術論は注目されておらず、しかもその意味は理解されていなかった。しかも戦後、まもなく始まった世界的冷戦体制下におけるソ連を中心とする一枚岩的な国際共産主義運動と、その正統（もしくは公認）マルクス＝レーニン主義のもとでは、グラムシが語られるのはまれで、たとえ語られても、周辺的な地位が与えられるにすぎなかった（28）。

イタリアにおいてグラムシが自由に語られるようになるのは、一九五〇年代半ばから後半にかけてのスターリン批判とソ連共産党第二〇回大会をうけて、イタリア共産党がその第八回大会で「社会主義へのイタリアの道」を確定してからだった。とはいえグラムシの「科学・技術論」や「アメリカニズム・フォーディズム」に関するグラムシの考え方に注目する研究者や政治家はいなかった。一九五八年にはじめてローマで開催された大々的なグラムシ研究集会において、重要な役割を演じたトリアッティは、レーニンとグラムシの連続性に力点をおいた報告をしたものの、グラムシの「科学・技術論」や「アメリカニズム・フォーディズム」への言及しなかった。それらはトリアッティの念頭になかったし、他の報告者や発言者も同様だった。

こうした背景には、コミンテルン系の左翼のあいだで、戦前と同様、戦後もアメリカ社会への十分な分析もなく、資本主義はたえず破局的危機にさらされているという根強い「終

末論」的解釈があった。他方、社会民主主義系の諸潮流は、コミンテルン系とは対称的に、政府の役割への期待のもと市場の正常化や経済政策の範囲拡大の“計画”を追究し、政治的・経済的緊張関係などははじめから念頭になかったのである(28)。

研究者のあいだで、グラムシの「アメリカニズム・フォーディズム」の重要性が再発見されはじめるのは、一九七五年のヴァレンティーノ・ジェルラターナ編によるグラムシが書いた配列に近い形による校訂版『グラムシ「獄中ノート」』（全四巻）の刊行以降のことである。

それによって読者は、「アメリカニズムとフォーディズム」がグラムシの獄中における主要論題の一つであり、彼はこのテーマを最初の「ノート」の第一頁にあげていたこと、それに関連する論稿を何冊かの「ノート」の各所に書いていること、そして三三年末、病気治療のため拘禁状態のまま民間病院にうつされてから、「アメリカニズムとフォーディズム」と題する「ノート22」をおこし、それまで書いた関連論稿をまとめ整理したこと等々が分かるようになった。それによって「アメリカニズムとフォーディズム」が、入獄以来の中心的テーマの一つであり、それをグラムシがどのように位置づけていたかが分かるようになったのである。

これに注目したのが、アルベルト・カラッチョロとフランコ・デ・フェリーチェで、前者は、「グラムシとその時代の歴史」と題する報告で焦点を「アメリカニズム」にあて、後者は、デ・フェリーチェは、「グラムシにおける受動的革命・ファシズム・アメリカニズム」と題する論文で、グラムシがイタリアとアメリカを結びつけるものとして、「フォーディズム（資本主義的再編の形態）」を考えていたと指摘した。両者は、一九七七年のグラムシ研究所主催の「グラムシにおける政治と歴史」と題する国際研究集会で発表した。だが当時、このカラッチョロとデ・フェリーチェのような新しいグラムシの発見への評価も、イタリアの内外の研究者のあいだで、高くはなかった。

2. 戦後、イタリア労働組合運動における二度の大敗

それだけではない。労働組合運動においても、グラムシの科学・技術論は顧みられることなく、工場内の現実から目がそらされていた。戦後、西側最強といわれたイタリア労働組合運動が二度にわたって手痛い敗北を喫するのも、こうした傾向と無関係ではなかった。しかもその舞台が、いずれもトリノのフィアト工場だったことも象徴的だった。

ごく簡単にいうと、最初は、第二次大戦末期の華々しいレジスタンスと国民解放闘争の延長線上に展開された「労働プラン」の破綻と結びついていた。この「労働プラン」は、一九四九年一〇月のイタリア労働総同盟（CGIL）の第二回大会において提起され、当時、日本にも紹介されて話題をよんだもので、保守的・寄生的政策によって追いこまれている生産の停滞、増大する失業、経済の衰退からイタリアを救い出すためとして、つぎのような内容の綱領をかかげた。独占電力企業の国営化、南部開発のための土地改革、住宅・学校・病院などの建設のための国営機関の設立、公共事業に関する大幅な計画の実施等々。労働組合が、国の経済的・社会的再生という課題と結びついた経済綱領を自らの任務として具体的に提起し、全組織をあげ意識的に取り組むのは、はじめてのことだった。

この闘争は何千万もの勤労者や中間諸階層を巻きこんだ運動として、政府に南部開発基金や土地改良などいくつかの行政措置をとらせ、農業における雇用増大を促進させ、いくつかの工場を救済した。こうして労働組合は、もはやその行動範囲を伝統的な職業的・同業組合的レベルで労働者の生活条件を守り改善することだけに限定することなく、國の経済的・社会的改革という課題にまで取り組むことができるし、またとりくまなければならないという労働者の階級的自覚と政治的成長を助けた。

しかしながらこの「労働プラン」をめぐる運動は、重大な誤りと弱点を内包していた。それは、反独占という課題に取り組むことなしに、基幹産業の改革や公共投資計画を問題にしたことだった。他方で、戦後のイタリアの工業資本家たちは大工場において新しい技術導入にともなう生産工程の近代化・合理化、つまりテイラー・フォード・システムによる戦後復興を着々と進めており、労働環境や労使関係に重大な影響を及ぼしはじめていたにもかかわらず、労働組合はそうした諸変化に注意していなかった。

それは二年ごとに行われる工場内部委員会の選挙における左派労働組合（CGIL）の後退としてはっきりあらわれた。すなわち一九五三年のフィアトでの選挙では七一・三%と圧倒的多数を占めていたCGILが、五五年の選挙では一挙に三六・七%へと少数派に転落した（五七年にはさらに二一・一%に下がった）。いかなる弾圧や組織分裂のもとでも、CGILはつねに労働者の圧倒的な支持をえているという自身を打ち碎かれることになった。

選挙直後に開かれたCGILの指導委員会で、この敗北をめくって激論がかわされた。その会議の総括で、書記長G・ディ・ヴィットリオは、「われわれの誤りは、生産活動、生産構造、賃金形態など工場内で生じているさまざまな諸変化への追究を怠ってきた点にある」と自己批判し、「CGILの全組織は、労働組合問題への取り組みにおける活動や指導のあり方を根本的に改める必要がある。こうした取り組みのなかで、技術構造や賃金構造や賃金形態に生じつつある諸変化が、労働者の統一を破壊・孤立させ、各個撃破させている新しい管理や抑圧の科学的方法の採用にたいして、労働者の現実的諸要求を対置する必要がある」（29）と強調した。以後、十数年もの努力によって左翼労働組合は力を回復していった。

イタリア労働組合運動における二度目の大敗は、それから二五年後の一九八〇年秋のことだった。九月、フィアト経営者は経営悪化を理由に、従業員一万四〇〇〇人の大量解雇を発表した。金属機械労働者同盟（CGIL傘下）は、それを許すならば、関連企業をふくめ一〇万の労働者の失業が予想されるとして、三大労組やトリノの革新市政などをあげての全面支援のもとにストライキに入った。

だが、その内部にはさまざまな矛盾と対立がうずまいていた対立は、ストライキの三五日めに、「われわれは働く権利がある」と訴える四万人のデモとなって爆発した。それは、従来のブルーカラー（現場系労働者）とホワイトカラー（技術系・事務系）の伝統的対立ではなかった。予想もしなかったこの四万人のデモに驚いた労働組合の闘争本部は、不本意ながらストライキを中断せざるをえなかった（30）。

こうして労働組合側は大きな衝撃を受け、七〇年代後半頃から工場内で急激な技術革新

と産業構造や労働再編成過程への変化に注意を怠っていたことに改めて気づいた。新しい技術改革による生産・管理組織の深刻な革命が始まっており、あらゆる分野で機械（ハードウエアー）から技術・情報システム（ソフトウェアウエアー）への急速な移行が進行中であり、そこでは技術労働者だけでなく、知的・事務的・サービスの労働の比重と役割が増大し、多くの単純反復的作業においてもさまざまな変化が急速に進み、熟練や技能経験を職制や古参労働者から新参者に受けつぐという伝統的パターンは崩れ、伝統的職制も危機に陥っていった。ブルーカラー（現場系労働者）とホワイトカラー（技術系・事務系労働者）という従来の区別や、それにもとづいた“ 戦闘性 ” とか “ 連帯 ” といったかけ声やスローガンはもはや通用しなくなっていた。

3 . 日本の場合

以上のような問題はイタリアに限られるものではなかった。イタリアとは若干形は異なるが、日本では“ 戦闘的 ” と自他ともに認める労働組合ほど、工場における技術革新に背を向けてきた。それは先に見たようなグラムシの主張、すなわち「イタリアの労働者たちは、個々人としても労働組合としても、積極的であれ消極的であれ、コスト引き下げを目的とする技術、労働の合理化、企業全体のより完全な技術的組織化の導入にたいして、反対したことなど一度もなかった。それどころか、まったく逆だった。……つまり労働者こそが、新しくより近代的要求の担い手であって、彼らは自分たちの手でそれを粘り強く主張していたのだ」という姿勢とは、まったく逆な方向だったのである。それは科学的・技術的価値の創造というきわめて重要な「人間の活動」の担い手となるどころか、それを軽視もしくはそれに背を向けるという、本質的に「反動的」な指向だった。この二〇年来の労働組合運動の凋落は、それがそれがすべてではないにせよ、重要な原因の一つだったことは疑いない。しかもその痛手から、今なおたちなおれていない(31)。

・ 新しい時代における文化革命への問い

以上のようなグラムシの科学技術論に示唆されて、すでに始まっている新しい文化革命に、次のようないくつかの角度から考えることで、私の報告を結びたい。

1 . 新しい文化革命の波が、いつ、どのような形で始まり、今どのような状態にあるのか。

生産の分野で始まった新しい文化革命の波をいち早く指摘したのは、プリンストン大学の経済学者フリッツ・マクラップだった。彼は、1962年に「合衆国における知識の生産と配分」と題する論文を発表し、ものを扱う労働者よりも、シンボルを扱う労働者のほうが多くなっているということを統計的に示すことによって、新しい時代研究への基礎を築いた。また同じ頃のIBM白書は、筋肉労働から頭脳労働または精神的・人間的な技術を必要とする労働への移行を予言した。だが当時は、これらの初期の警告はあまりにも夢想的だとして、ほとんど無視された(32)。

しかしながらこうした筋肉労働から、サービスの・超象徴的作業への広範な移行は、新しい知識にもとづく文化的・人間関係の幅広い技術の台頭として、劇的でもはや動かし

がたいものとなり、長年、企業と労働組合そして政府のあいだできずかれてきた力関係を脅かすこととなっている。

同様な変化は労働の場だけではなかった。ほとんど同じ頃、文字文化・活字文化に決定的ともいえる変化をもたらしたのが、別々の分野から出現したテレビとコンピュータだった。

ブラウン管を使った電子式テレビジョンが発明されたのは、第二次大戦直後のことである。はじめのうちは、映画と音響を結びつけているという点で、映画とレコードの合体としてとらえられ、活字文化の圧倒的比重のもとで育った旧世代のあいだでは、蔑視と嫌悪にもとづいた排斥論が圧倒的だった。ところが、そのテレビにいち早くとりつかれたのは、子供たちである。大人のように活字信仰の犯されていない彼らは、テレビが映し出す人の表情や動きや声・音響にひきつけられた。それにたいして各方面で繰り返し指摘されたのが、テレビ視聴が子供たちにおよぼす否定的影響だった(33)。

テレビとほとんど同じ頃、出現したのがコンピュータである。1950年代のはじめ頃、それは電子の記憶とデータ処理を機械に指令するプログラムとが結びついた科学技術が生んだ物珍しい機械にすぎず、限られた専門的技術者だけのものだった。だが50年代から60年代にかけて、コンピュータは産業界への浸透を開始し、あっというまにコンピュータの小型化が進み、能力は高まり、価格は低下した。安価で能力抜群のコンピュータが工場、実験室、販売店の現場など、いたるところで使われはじめた。現在、地球上の8億台を超えるパソコンが7~8人に一台の割合で使われているといわれ、しかもそれはそれぞれのネットワークでつながって動いていて、もし、コンピュータがとつぜん姿をけしたら、先進経済は30秒ともたないとさえいわれるほどになっている。

それだけではない。コンピュータは前記のテレビの機能と、携帯電話やインターネットという形で結びついて、あっというまに諸々のメディア・テクノロジーが社会的諸活動を媒介して、大量の情報が日常的に移動・複製・流通し、今日のわれわれの日常的現実を動かしている。そうしたなかで従来の遠近関係は変容、分解し、遠距離の相手とコミュニケーションを交わす社会空間としてのインターネット・コミュニティが形成されている。

それは、長いあいだ続いてきた文化における文字・活字文化の独占的地位をおびやかし、人類がかつて経験したことのなかった新しい知的環境を生みだしつつある。それだけではない。経済によって発展させられた科学技術の諸力は、人間生活の物的な基礎である環境を破壊しつつある。こうしてわれわれはいま、内にむかっただけの爆発と外にむかっただけの爆発というかつて経験したことの無い文化革命の危機に直面している。

われわれはどこに行くのか。この激動の時代にあって、過去の世界秩序の枠組みで対応できると考えるのは、狭い視野と想像力を欠いた見方というしかない。ただひとつ確かなことは、明日は、われわれを仰天させる時代になるだろうということである。しかしながら、歴史はつねに強力に動いているようでも、そこには人間の力が入り込む余地と柔軟性があり、人間の行動はそれを遅らせたり、その方向を変えたり、またそのある部分を押し進めたりすることができる。そうした意味で、私はグラムシが愛したモットー、「知のペシムズム、意思のオプティミズム」を信じている。

2. 新しい文明を象徴するものは何か

それを問い、模索のなかで私の脳裏にうかんだのが、『資本論』の冒頭におけるマルクスの言葉である。マルクスは、「なにごとにも初めが困難だということは、どの科学の場合にもいえることだ」として、ブルジョワ社会における経済的細胞としての「商品」の分析から始めた。このマルクスのいう「商品」に相応するものとして、私は、新しい文明における細胞形態は「知識」であるという仮説をたてた。この着想にヒントを与えてくれたのが、「科学進歩の重要な“道具”は、知的（そして政治的）な秩序であり、方法的なものである」（34）というグラムシの指摘だった。

しかもグラムシはこの「知識」を、「感じること」と「知ること」そして「理解すること」という重層構造にとらえ、そのあいだの交流関係の重要性を指摘した（35）。亀淵すすむ氏は理論物理学の観点から「知識の三重構造」として精密化し普遍化し、国際会議で発表して話題をよんだ（36）。

それはまた、コンピュータの時代の表現として、データ 情報 知識という関係でとらえることができる。つまりデータという相互に無関係ではばらばらな項目は、情報という一定の範疇や種類、類型に仕分けられ、それはさらに磨かれてより一般的な叙述のための知識の源となりうる。それは、グラムシの友人P・ズラッフアの主著『商品による商品の生産』になぞらえ、『知識による知識の生産』と表現することができよう。

しかしながら、科学技術の発達は独立したものではなく、さまざまな諸側面と収斂し組み合わさることによっていっそう飛躍的な展開をみせる。そうしたなかで重要なのは、大衆の意識における深部からの変化であり、その挑戦を受けているのが、知識の伝統的インフラストラクチャー（社会的生産構造）であり、それは「知的権威の危機」として現れている。とりわけ男と女、夫と妻、親と子、教師と生徒、上役と部下等々のあいだのそれぞれの役割が問いなおされ、かつて経験したことの無い新たな摩擦を引き起こし、さらに政府や政党や社会的諸組織のトップがことあるごとに批判されて、安泰なものは一つもない。

グラムシはそれを「危機」としてこう表現した。「危機とは、古いものが死に、新しいものがまだ生まれ出てこないという事態のなかにある。この中間的空白期間にはさまざまな病的現象が生まれる」（37）。つまりそこでは、従来の知的権威体制が威力を失って「指導的」ではなくなり、そのなかで伝統的な上下型・ピラミッド型のイデオロギーやヒエラルヒーが崩れ、大衆はそれまで信じてきたことをもはや信じなくなっている。今日がまさにそうした知的権威の危機の時代なのである。

3. 科学技術における「主体」の問題

この報告のために、私は科学技術史の概略を調べて、多くを教わった反面、「主体」としての「人間」が問題とされていないことに驚かされた。そこでは、科学技術の発展が社会から隔絶した科学者・技術者の共同体内での自己完結する営みととらえられてきた。そうしたことが結果として、科学者・技術者たちが、その科学技術の力をいかに使うべきか、また使ってはいけないかといった「社会的責任」について自ら問うてこなかったことと関係があるのではないか。

こうして、科学技術が国家目的や企業の利潤目的に「奉仕」するようになり、科学者・技術者のグループは、外部からあたえられる研究の「使命」を膨大な資金援助とともに請け負っている。そのなかで、政府機関や経営者は科学技術の発展と成果にたいする唯一の主体としてふるまい、他方、労働組合運動はそれに異議を申し立てることなく、その一面的な支配構造を「物神崇拜」的に受けとるという関係が、科学技術をめぐって形成されてきた。ここでいう「物神崇拜」という表現は、資本主義社会における商品の価値が、本来生産者の社会的表現であることが隠されて、生産物そのものの対象的性質であると思いきまされているという、マルクスの言葉と同じ意味に使っている。

こうしたなかで、グラムシは例外的な存在だった。先に見てきたように、彼はトリノの工場評議会運動において、「労働者こそが、新しくより近代的な工業的要求の担い手であり、彼らは自分たちのやり方でそれを粘り強く主張していた」と誇らかに回想している。

そしてまた、『資本論』(38)における工場組織の発達の分析にヒントをえて、グラムシは、経営者側から「与えられている条件」をいかに労働者にとっての「主体的条件」たらしめるかを問題にした。つまり工場内において「与えられた条件は……産業発展の一歴史的局面にすぎず、過渡的なものであって、労働者階級の利害と結びつけて考えることができる」(39)と強調した。

それは科学技術にたいする働く者やその組織の役割と責任を自ら求め、科学・技術にたいする労働者・労働組合の側からの能動的な機能を主張するものだった。しかもグラムシはそれを「新しい知識人のあり方」と深くかかわる問題として、こう強調した。「建設者として、組織者として、恒常的な説得者として、実践活動に積極的に入り込み」、「技術 - 労働から技術 - 科学へ、そして歴史的・人間主義的考え方」を重視し、「“指導者”(専門家 + 政治家)になること」(40)と主張した。

もちろんグラムシのこのような主張は、第一次大戦直後の、しかも工場内という限られた条件内における模索だった。

ところが、第二次大戦後、状況は大きく異なっている。今日の科学・技術の進展による影響は、グラムシの時代と比較にならないほど深くかつ広範なものとなっており、科学者・技術者はもちろん市民の意識も大きく変った。

そのなかで注目すべき動きのひとつが、核兵器開発にたいする科学者たちの「社会的責任の自覚と反省」である。1955年の「核兵器の廃絶」をうったえる「ラッセル・アインシュタイン宣言」で、「科学者は非核化にむけてもっと努力しなければならない」という反省をこめた運動としはじまった。

だが、評論家で哲学者の唐木順三は、『「科学者の社会的責任」についての覚書』として、こう訴えている。「科学の研究には普遍的価値があつて、発見の喜びは純粹だとか、科学者という特別な身分にまだ拘わっているのではないか。その研究成果が及ぼした人類、地球規模の厄災にたいして、人間としてどういう自己反省や懺悔をしているのか、その声を一度もきいたことがない」。

さらにまた一九六八-一九六九年にフランスおよびイタリアで学生運動を起爆剤として大衆闘争があり、少し遅れて日本でも学生の反乱がまき起こった。それは、最近話題になつ

ている「団塊世代」の知的・政治的成長過程の出発点とも重なり、「科学と人間」が問われた。グラムシの言葉でいう「機動線」的に始まったこれらの反乱も、体制側の「複雑な経済力・社会的諸関係・政治諸力」による「陣地戦」ではね返され、短期間のうちに終息・敗北し、以後、長期間の低迷を余技されることとなった。

しかしながら、そうしたなかでさまざまな領域で根づいていったのが環境運動、フェミニズム運動、消費者運動であり、市民が従来とはまったく異なった新たな主体として登場してきた。そこには、教育の普及、日常的な異文化との接触、とりわけ情報技術の普及があり、市民は直接、幅広い情報を交換・交流しうる条件のもとで、国家および世界と出会い、そのうえにますます直接的な位置を占めるようになっていく。それは、過去には見られなかった人間の英知と新しい文化の創造、すなわち新しいヘゲモニー形成のための条件にほかならない。事実、科学技術が生活のあらゆる面で根づくなかで、市民は科学技術の「社会責任」を社会諸関係の総体との絡み合いのなかでとらえはじめ、「市民にとって真に必要な科学技術とは何か」という基本的な発想のもとに、社会権力構造の歴史的転換の可能性を内包する多種多様な市民運動として各地に広がっている。

これを私の結論として、報告を終わりたい。

- (1) 例外的のものとして、『クリティカ・マルクシスタ』(1995年2号)のデレーク・ブースマン「グラムシ『獄中ノート』における科学と翻訳可能性」をあげることができる。同論文は中島康/中村克己訳で『LA CITTA' FUTURA (未来都市)』(東京グラムシ 会、第20、21号)に掲載された。
- (2) 石堂清倫訳編『グラムシ問題別選集 工場評議会運動』、現代の理論社、1971年、p. 148 - 9。
- (3) 同前、p. 86。
- (4) これについては、すでに他のところで詳述した(「工場評議会運動 グラムシの時代と今日」、拙著『イタリア民主主義の構造』所収、筑摩書房、一九七七年)。
- (5) 校訂版『獄中ノート22』、p. 2165 (以下「ノート」とする)。
- (6) 同前、pp. 2139 - 2181。
- (7) 同前、p. 2164。
- (8) 同前、「ノート11」、pp. 2149 - 50。
- (9) 同前「ノート5」、p. 635。
- (10) 「ノート22」、p. 22、2159。
- (11) B・ヘッセン、秋間他訳『ニュートン力学の形成』(法政大学出版、1986年)のP・G・ワースキー解説参照。
- (12) ただ定かではないのは、一九二九 - 三〇年のコミンテルン路線の「左旋回」(「階級対階級」)をうけて、急テンポの工業化・集団化のもとでの科学者と政府との関係にかかわる激しい論争がおこなわれ、その過程で「右翼偏向」を批判されコミンテルン議長およびソ連共産党政治局から追われていたブハーリンを、国外に出ることがきわめて困難な時期に、国際的学会に代表団の団長として送りこむという決定が、ソ連当局でどのようになされたかという事実あり、またそれが当時、受け入れ側のイギリス関係者のあいだでどの程度理解されていたのかという点である。これについては、

私の報告からそれるので、省略する。

- (13)この手紙(1931.8.23)は『岐路に立つ科学』にそえてP・ズラッフアが義姉タチャーナにを介して獄中のグラムシにあてた手紙である(石堂・いいだ・片桐編『生きているグラムシ』、社会評論社、1989年、474頁)。
- (14)「ノート11」、p.1455。
- (15)同前、p.1457。
- (16)同前、1443-1445。
- (17)同前、p.1404。
- (18)同前、pp.1468,1476。
- (19)同前、pp.1458-9。
- (20)ここで二つの疑問が残る。獄前期の1925年の4~5月にかけて、グラムシは「党内学校初級課程論」で「同志ブハーリンの史的唯物論の理論にかんする著書」を翻訳してテキストとして配布することを約束している(Opere di Antonio Gramsci, La costituzione del Partito comunista 1922-1926, Einaudi, 1971, p.56)。それがなぜこのような批判に変わったのか? イギリスの研究者たちの強い関心をよんだ『報告書』に収められたヘッセン(ゲッセン)報告その他をグラムシが読んだ形跡は見られないことである。
- (21)「ノート11」、p.1424。
- (22)同前、p.1420。
- (23)同前、p.1417。
- (24)「ノート15」、p.768。
- (25)『レーニン全集』14, p.9。
- (26)前出拙著『グラムシ「獄中ノート」解説』、185頁。
- (27)ここで三つの点を補足しておきたい。一つは、ズラッフアから『岐路に立つ科学』を受けとったグラムシは、ブハーリン報告を読んだが、その他の報告を読んだ形跡は「ノート」からも「手紙」からも認められない。もう一つは、この『岐路に立つ科学』に収録されている報告には、ブハーリンの他、F・ヨッフエ「物理学と技術」、M・ルビンシュタイン「科学の諸関係、資本主義とソ連における科学技術」、B・ザヴァドフスキ「組織的發展過程における<物質>と<植物>」、E・コールマン「物理学と職靴学における力学と統計的秩序」、N・I・ヴァヴァイロフ「最近の研究に見る世界農業の起源の問題」、W・Th・ミトケヴィチ「ファラデーの業績と電気エネルギーの適用における近代的発展」、M・ルビンシュタイン「ソ連における技術的再建の基礎としての電化」、B・ヘッセン(ロシア語ではゲッセン)「ニュートン<プリンキピア>の社会的・経済的起源」、E・コールマン「数学とその再建方向にける現在の危機」、E・コールマン「カール・マルクスの未刊執筆にかんする短いコメント」がふくまれていた。さらにもう一つはこのヘッセンは1933年にソ連科学アカデミー準会員に推されるが、36年、「トロツキー派の反革命活動をおこなった」として逮捕、銃殺された。またブハーリンも38年に「帝国主義の手先」として処刑された。
- (28)この日本にかんする部分は前出B・ヘッセン、秋間他訳『ニュートン力学の形成』、法政大学出版、1986年を参照した。

- (29) 以上の第二次大戦後、トリアッティ指導のもとにおけるグラムシ「獄中ノート」刊行にいたる経緯については、拙著『新グラムシ伝』の第20章、413 - 415頁を参照されたい。
- (30) (Notiziario CGIL, 1955.5)。私事にわたるが、私がイタリア労働運動に関心をいだき、実地に研究しようとするようになったのは、この敗北におけるG・ディ・ヴィットリオの自己批判に接してからである。
- (31) 拙論「フィアト争議とイタリア労働組合運動」、『月刊労働問題』、一九八一年三月 号参照。
- (32) これについて、別の機会にはあらためて取りあげる。
- (33) A・トフラー『パワーシフト』、徳山次郎訳、フジテレビ出版、1991、p.116参照。
- (34) 拙著『図書館の第三の時代』（リプロポート、1991年）の「第三の時代への胎動」として、この問題を論じた（p.147～）。
- (35) 「ノート11」、p.1420。
- (36) 同前、pp.1505 - 06。
- (37) 拙著『新グラムシ伝』、448 - 452頁。
- (38) 「ノート3」、p.311。
- (39) 『資本論』第一巻、382頁、392頁。
- (40) 「ノート9」、p.1137。
- (41) 「ノート12」、p.1551。